『彼岸過迄』に現われた市蔵の心の歪み

- 市蔵の性格描写と出生の悩みの間における矛盾 -

矢野尊義* vano@sejong.ac.kr

-<目次>-

1. 序論

2. 松本が見た市蔵

2.1 市蔵の性格

2.2 市蔵の僻み

3. 市蔵の自意識

4. 心の歪み

5. 結論

主題語: 心の歪み(warped personality)、 僻み(inferiority complex)、 自閉症(alienation)、 人格障害(personality disorder)、 孤独(loneliness)

1. 序論

『彼岸過迄』(1912)は漱石自身が自認し、すでに多くの研究者によって指摘されてきたように全体としての筋の把握が困難な作品である」)。『彼岸過迄』の後半にある「須永の話」と「松本の話」では市蔵と千代子の結婚問題をめぐって市蔵の性格的問題と出生の問題が明らかになる。「須永の話」は須永市蔵の性格が特異であり、そのため許嫁の千代子との交際もうまくいかず、結局二人の関係は破局的局面を迎えるという話であるが、宮井一郎は「漱石は自己の偏狭な性情のなかにまず我執の姿を探ろうとする。『彼岸過迄』はそのような小説である」2)と言い、平井富夫は市蔵について「親和性素質の異常性格者の特徴である。この小説の謎のうちに漱石の生涯の神経症の遠因が秘められている。漱石の神経衰弱はうつ病だった」3)と言った。このように『彼岸過迄』に現れる市蔵の異常な性格は作者漱石の病的な

^{*} 世宗大学 国際学部 日語日文学專攻 助教授

^{1)「}離れるとも即とも片の附かない短篇が続く丈の事」かもしれぬと、漱石自らその手際を危ぶんだように、『彼岸過迄』においては辻褄のあわぬことが随分と多い(上出恵子(1991)「夏目漱石『彼岸過迄』序論」玉井敬之(編)『漱石作品集成 彼岸過迄』桜楓社、p.209、p.213)『彼岸過迄』という小説の不可解さを指摘する評価は多い(平井富夫(1990)『神経症 夏目漱石』福武書店、p.228)

²⁾ 宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社、p.138

性格を現したものであると言う研究者が少なくないか。

一方、「松本の話」は叔父である松本から見た市蔵の性格についての話から始まって最後に彼が母の実の子ではなかったことが明かされるという筋である。実は市蔵もすでにそのことに気づいており、そのためにずっと一人悩んできたということが市蔵自身からも明かされ、それによりそれまで不可解だった市蔵の性格や不自然な態度も少なからず納得がいくという構成である。平岡敏夫は『彼岸過迄』の市蔵の性格に対して「須永の先天的な性格とすることはできず、運命的な出生の秘密によって形成されたところが大きい。出生にかかわる暗い疑惑が須永のそういう性格形成の根本原因とみることができる」5)と言い、市蔵の暗い性格は出生の秘密や彼の出生に対する疑惑によって形成されたと見なした。全体の筋から見てこういう見方が妥当であると言えるが、「須永の話」や「松本の話」にはこういう解釈を許さないような市蔵の異常な性格描写も多くありの、市蔵の先天的とも言える精神的病を疑わせる。それゆえ市蔵の性格が精神的病によるものなのか、後天的に形成されたものなのか、これだけの指摘で充分に納得がいくとは言いがたい。具体的な作品分析によって市蔵の性格と市蔵の出生に対する悩みの関係を明らかにする必要があろう。

今まで『彼岸過迄』は「須永の話」のみが高く評価された感があるが、『彼岸過迄』の他の章や『彼岸過迄』全般に対してはそうとは言えない。「須永の話」と「松本の話」に限って言えば、市蔵の叔父である松本が市蔵について語る「松本の話」と市蔵本人が自分の過去を回想して語る「須永の話」は、話が連結しているようで必ずしも内容が一致しているとは言えず、「須永の話」と「松本の話」は市蔵の性格描写において少なからず矛盾を呈していると言えるが、今まで市蔵の性格については「須永の話」を中心に論じられた傾向があり、市蔵の

³⁾ 平井富夫(1990) 前掲書、p.230、p.236、p.339

⁴⁾ これ以外にも専門医たちによる分析は漱石の精神状態に対する精神病理学的関心からなされたものが多い。よって作品に対しても精神的病の症状の現れと見る観点から分析された傾向がある。北垣隆一は漱石文学には「異様な性格や感情や行動がよく説明もされぬままに展開され、漱石の心の奇妙なわだかまりがいたるところに露出されている」(北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.12.)と言い、七谷七郎は「漱石が自分に見た小心、臆病等々は実は鬱病の心理であった」(七谷七郎(1963)『漱石の病跡』勁草書房、p.31)と述べ、小木貞孝も「漱石のうつ病が三回の病期をもって進行したらしい。見事に病気を描写しえた」(小木貞孝(1991)「漱石の作品と病跡」平岡敏夫『日本文学研究大成夏目漱石Ⅱ』國書刊行会、p.323)と述べた。

⁵⁾ 平岡敏夫(1979)『漱石序説』塙書房、p.281

⁶⁾ 読者には殆んど不可解な思がする所さへある。須永の微妙な心理とは容易に説明し尽くすことの出来ないものであろう(岡崎義恵(1991)「『彼岸過迄』」玉井敬之(編)『漱石作品集成彼岸過迄』桜楓社、pp.30-31)

⁷⁾ 事実を話した結果は「非常な治療的效果」を須永は松本に示す(秋山公男(1991)「『彼岸過迄』 試論」玉井 敬之(編) 前掲書、p.179)と指摘されているように松本が出生の秘密を話した後、須永の性格は急変す る。

性格を精神的病によるものと見なす研究が多かった。しかし、本稿では「松本の話」と「須永 の話」の両者を比較して市蔵の性格を分析し、そこに現れる矛盾を明らかにすることで市蔵 がなぜこのような性格になったのかを心の歪みという観点から解く。

2. 松本が見た市蔵

2.1 市蔵の性格

松本寛は「須永の内面の恐るべき実相は、『松本の話』の章において叔父松本の視点から、 **殆んど病的というに近い自閉的世界として示される。8と言い、久保田芳太郎も須永は「外** 発的文化と内発的文化とのカオスないし交差点に深く苦しみながら佇立していて、須永が しだいに一種の自閉症になったのも無理ならぬことであった」のと言い、いずれも須永が自 閉症の素質を持っていると見なしている。『松本の話』において松本の見た市蔵は次の如く である。

市蔵という男は世の中と接触する度に内へとぐろを捲き込む性質である。だから一つ刺戟を 受けると、その刺戟がそれからそれへと廻転して、段々深く細かく心の奥に喰い込んで行く。 そうして何処まで喰い込んで行っても際限を知らない同じ作用が連続して、彼を苦しめる。仕 舞にはどうかしてこの内面の活動から逃れたいと祈る位に気を悩ますのだけれども、自分の力 では如何ともすべからざる呪いの如くに引っ張られて行く。そうして何時かこの努力の為に斃 れなければならない、たった一人で斃れなければならないという怖れを抱くようになる。そう して気狂の様に疲れる。これが市蔵の命根に横わる一大不幸である10)。 (彼岸渦迄: 328)

松本によると、市蔵は非常に内向的な性格であり、他人に接する度に過度な刺戟を受 け、それは内面へ内面へと向かって彼を悩ませ、苦しませるのだと言う。彼はそのような 自分自身が作る心の苦しみや悩みから逃れようと努力するのだが、それがかえって彼を疲 労困憊させ、「気狂の樣に疲れる」と言う。苦悩の悪循環に陥らせるのだと言うのである。

⁸⁾ 松本寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.13

⁹⁾ 久保田芳太郎(1994)『漱石- その志向するもの』三弥書店、p.270

¹⁰⁾ 夏目漱石(2016)『彼岸過迄』新潮社、p.328. 以下『彼岸過迄』の引用は、本書による。 カッコの中の數は ページを意味する。

彼はこのような生きることの苦しみのためにこの世で挫折するよりなく、市蔵はそのことを恐れているのだと言う。このような性格に生まれた市蔵に対して松本は叔父としてもどうしてやることもできずに、ただ傍観しているよりないことに遺憾の意を表している。

次は松本が見た市蔵の特異な行動である。

縁傳いに戸を開けると、彼は咲子の机の前に坐って、女の雑誌の口絵に出ている、ある美人の写真を眺めていた。その時彼は僕を顧みて、今こういう美人を発見して、先刻から十分ばかり相対している所だと告げた。彼はその顔が眼の前にある間、頭の中の苦痛を忘れて自から愉快になるのだそうである。僕は早速何処の何者の令嬢かと尋ねた。すると不思議にも彼は写真の下に書いてある女の名前をまだ読まずにいた。僕は彼を迂濶だと云った。それ程気に入った顔なら何故名前から先に頭に入れないかと尋ねた。時と場所によれば、細君として申し受ける事も不可能でないと僕は思ったからである。然るに彼は又何の必要があって姓名や住所を記憶するかと云った風の眼使をして僕の注意を怪しんだ。つまり僕は飽くまでも写真を実物の代表として眺め、彼は写真をただの写真として眺めていたのである。 (彼岸過迄: 331-332)

ここで重要なことは市蔵が十分間もの間、女性の写真に見入っていたにもかかわらず、その女性に対してそれ以上の関心を持たなかったということである。女性が気に入ったのならば、その写真の下にある女性の名前を読んで彼女が誰なのか知ろうとするのが普通であるというのである。しかし、市蔵の場合は「その顔が眼の前にある間、自から愉快になる」と言って「ただ眺めていた」ということが不思議だと言う。松本によれば、普通は写真を実物の代わりとして眺め、その実物に関心を向けるはずなのに、市蔵はその実物については何ら関心を示なかったと言うのである。すなわち、市蔵は実物の女性ではなく、写真に現れた女性の表象が気に入ったというわけである11)。

「自閉症児は見かけと本当を区別することができない。彼らは自分の心的状態を自覚しない。自分の物の知覚と、その物についての自分の知識とを区別しない」¹²と言われるが、この場面から見る限り、市蔵にとって周囲の世界はあまり関心がないように見える。自分の思いの世界が重要なので彼にとっては現実の女性は関心外で、写真の像が彼の思いに適ったということであろう。市蔵の関心は結婚や恋愛にはなかったからである。市蔵はこの時、何を考えていたのであろうか。その写真から何かを思い出し、物思いに耽っていたの

¹¹⁾ 外界からの刺激によって生じるのが知覚、内界からの刺激によって生じるのが表象あるいは空想表象と呼ばれている。自閉症においては体験世界が独自であるだけでなく、意識の構造そのものが通常のあり方とは異なっている。(竹中均(2012)『精神分析と自閉症』講談社、p.93、p.152)

¹²⁾ J・W. アスティントン/松村鴨隆(訳)(2000)『子供はどのように心を発見するか』新曜社、p.197

であろうか。そうでなければ、何も考えないでただ見入っていたというのであろうか13)。 ここに問題の鍵があると言える。

彼は何事によらず母を満足させたいのは山々であると答えた。けれども千代子を貰おうとは 決して云わなかった。 意地ずくで貰わないのかと聞いたら、 或はそうかも知れないと云い切っ た。もし田口が遣っても好いと云い、千代子が来ても好いと云ったらどうだと念を押したら、 市蔵は返事をしずに黙って僕の顔を眺めていた。僕は彼のこの顔を見ると、決して話を先へ進 める気になれないのである。畏怖というと仰山すぎるし、同情というとまるで憐れっぽく聞こ えるし、この顔から受ける僕の心持は、何と云って可いか殆んど分らないが、永久に相手を諦 らめてしまわなければならない絶望に、ある凄味と優し味を付け加えた特殊の表情であった。 市蔵はしばらくして自分は何故こう人に嫌われるんだろうと突然意外な述懐をした。僕はその 時ならないのと平生の市蔵に似合しからないのとで驚ろかされた。何故そんな愚痴を零すのか と窘なめる様な調子で反問を加えた。「愚痴じゃありません。事実だから云うのです」「じゃ誰が 御前を嫌っているかい「現にそういう叔父さんからして僕を嫌っているじゃありませんか」僕は 再び驚ろかされた。(中略)「おれは御前の叔父だよ。何処の国に甥を憎む叔父があるかい」市 蔵はこの言葉を聞くや否や忽ち薄い唇を反らして淋しく笑った。僕はその淋しみの裏に、奥深 い軽侮の色を透し見た。 (彼岸過迄: 333-335)

市蔵は母親が許嫁と思っている従妹の千代子との結婚に対して気がすすまず、悩み続け ている。母親のことを思うと断りづらく、だからと言ってこの結婚が成立するとは思って いないからである14)。 叔父の松本が千代子の父親が承託し、千代子本人も市蔵のところへ 嫁に行ってもいいと言ったとしてもそれでも「意地ずくで貰わないのかと聞いたら、或はそ うかも知れないと云い切った」と言う。この時の市蔵の顔は「永久に相手を諦らめてしまわ なければならない絶望に、凄味を付け加えた」ような「特殊の表情」だったと言う15)。この市 蔵の顔を目の当たりにした松本は「畏怖」とも「同情」とも言えないものを感じたと言う。

このように松本はこの時の市蔵の尋常でない反応を驚きを持って語っているが、この後

¹³⁾ 分裂病患者は場合によっては表象の世界に捉えられていることがあり、あたかも夢の中に入って行 くようであり、彼は世界を他の人間とは別のように見ている。(ヘル、フィッシャー・フェルテン/植 木啓文(監訳)(1998)『みんなで学ぶ精神分裂症』星和書店、p.55、p.62)市蔵は松本が部屋に入って来る まで同じ姿勢で同じ写真を見続けていた。

¹⁴⁾ 過保護の母親に育てられた子どもは幼児期の共生関係から卒業できない。母親の願いどおりになっ て 自分の欲求は否定する。母親の動搖に反応する子どもにはナルシシズムの素地がつくられる。(ウ ルズラ・ヌーバー/丘沢静也(訳)(2005)『<傷つきやすい子ども>という神話』岩波書店、p.58)

¹⁵⁾ 自閉症児の顔の表情には異常で解釈しにくいものもある。彼らは情動の奥にある深い意味を理解し ない。彼らは他人に共感を示さない。(J・W.アスティントン/松村鴨隆(訳)(2000)前掲書、pp.200-201)

で市蔵が漏した「自分は何故こう人に嫌われるんだろう」という言葉は松本をさらに当惑させたと言う16)。これら一連の市蔵の言動は松本の理解を超えていたからである。「叔父さんからして僕を嫌っている」と言って「淋しく笑」う市蔵の「軽侮の色」を帯びたその「淋しみ」の笑いは何を意味しているのだろうか17)。以下、その真相を探りたい。

2.2 市蔵の僻み

次は松本が市蔵を叱った時の市蔵の様子である。

「御前は相応の教育もあり、相応の頭もある癖に、何だか妙に一種の僻みがあるよ。それが御前の弱点だ。是非直さなくっちゃ不可ない。傍から見ていても不愉快だ」(中略)「僻みさえさらりと棄ててしまえば何でもないじゃないか」と僕はさも事もなさげに云って退けた。「僕に僻があるでしょうか」と市蔵は落付いて聞いた。「あるよ」と僕は考えずに答えた。「どうい 所が僻んでいるでしょう。判然聞かして下さい」(中略)「じゃそういう弱点があるとして、その弱点は何処から出たんでしょう」「そりゃ自分の事だから、少し自分で考えて見たら可かろう」「貴方は不親切だ」と市蔵が思い切った沈痛な調子で云った。僕はまずその調子に度を失った。次に彼の眼の色を見て萎縮した。その眼は如何にも恨めしそうに僕の顔を見詰めていた。(中略)「僕は貴方に云われない先から考えていたのです。仰しゃるまでもなく自分の事だから考えていたのです。誰も教えて呉れ手がないから独りで考えていたのです。僕は毎日每夜考えました。餘り考え過ぎて頭も身体も続かなくなるまで考えたのです。それでも分らないから貴方に聞いたのです。貴方は自分から叔父だと明言していらっしゃる。それで叔父だから他人より親切だと云われる。然し今の御言葉は貴方の口から出たにも拘わらず、他人よりも冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした」僕は頬を伝わって流れる彼の涙を見た。

松本は市蔵に対して「僻みがある」と言った。そしてその「不愉快」な態度を早く「直さなくっちゃ不可ない」と戒めた。ところが市蔵は逆に「どういう所が僻んでいる」のかと反問し、「その弱点は何処から出た」のかと言ってかえって松本に喰ってかかった。「自分で考えて見」ろと言う松本に対しては「不親切だ」と反駁した。市蔵は松本の落ち度を責めているの

¹⁶⁾ 彼らは他の人から理解されず、嫌悪され、傷つけられ、拒絶されることに苦しんでいる。(ヘル、フィッシャー・フェルテン/植木啓文(監訳)(1998) 前掲書、p.65)

¹⁷⁾ 愛情のきずなを断たれた子どもたちには自閉、虚ろな目つき、感情鈍麻、正体不明の激しい不安、常同行動といった症状が現れてくる。(カトリーヌ・オディベール/平野暁人(訳)『「ひとりではいられない」症候群』講談社、p.50)

である。松本が叔父であるなら、なぜ今まで秘密を「教えて呉れ」なかったのかと抗議でも するかのように「恨めしそうに僕の顔を見詰めていた」市蔵はあたかも事の一部始終を知っ ているかのようで、松本を「萎縮」させた。 松本は市蔵の問題を「自分の事だ」とはねつけた が、考えてみるとそれは市蔵個人の問題ではなく、その問題を作り出したのは周囲の大人 たちだった。市蔵はその結果として生まれた時から悶え苦しまなければならなくなったの である。それにもかかわらず、周囲の者たちはみな知らぬふりをして事実を隠しとおして きたわけである。

「僕は僻んでいるでしょうか。慥かに僻んでいるでしょう。貴方が仰しゃらないでも、能く 知っている積です。僕は僻んでいます。僕は貴方からそんな注意を受けないでも、能く知って います。僕はただどうしてこうなったのかその訳が知りたいのです。いいえ母でも、田口の叔 母でも、貴方でも、みんな能くその訳を知っているのです。唯僕だけが知らないのです。唯僕 だけに知らせないのです。僕は世の中の人間の中で貴方を一番信用しているから聞いたので す。貴方はそれを残酷に拒絶した。僕はこれから生涯の敵として貴方を呪います」市蔵は立 ち上がった。僕はその咄嗟の際に決心をした。そうして彼を呼び留めた。

(彼岸過迄: 337-338)

市蔵は自分が「僻んでいる」ことを「能く知っている」と言う。ただ「どうしてこうなったの かその訳が知りたい」と言う。なぜなら「唯僕だけに知らせない」からだと言う。彼が訴えて いるのは「みんな能くその訳を知っている」はずなのに、どうして「唯僕だけに知らせない」 のかということであった。そしてその秘密を知っているにもかかわらず、それを明かそう としないでこのような態度を取り続ける叔父のことを「冷刻」だと言い、その叔父に対して 「貴方を呪」うとまで言った。「どうしてこうなったのか」とは、市蔵があることを理由に自 分が僻んだ性格になったことを表わしていると言える。ある理由とは、自分だけに知らさ れないある事実である。このことから市蔵は今まで疎外されたような孤独な立場で一人生 きてきたことがわかる。ゆえに市蔵はある秘密を前にして疎外されたような孤独感を味わ いながら僻んだような性格になっていったことがわかる。

結局、市蔵の断固とした熊度に松本は折れ、松本はとうとう市蔵の出生の秘密を明かす ことになる。

事実だけを一口に約めて云うと、彼は姉の子でなくって、小間使の腹から生れたのである。 (中略)何しろその小間使が須永の種を宿した時、姉は相当の金を遣って彼女に暇を取らしたの 一人立っている樣な気がします」

だそうである。それから宿へ下った妊婦が男の子を生んだという報知を待って、又子供だけ引き取って表向自分の子として養育したのだそうである。これは姉が須永に対する義理からでもあろうが、一つは自分に子の出来ないのを苦にしていた矢先だから、本気に吾子として愛しむ考も無論手傳ったに違ない。(中略)「おれはそう思うんだ。だから少しも隱す必要を認めていない。御前だって健全な精神を持っているなら、おれと同じ様に思うべき筈じゃないか。もしそう思う事が出来ないというなら、それが卽ち御前の僻みだ。解ったかな」「解りました。善く解りました」と市蔵が答えた。僕は「解ったらそれで好い、もうその問題に就てかれこれというのは止しにしようよ」と云った。「成程貴方の仰しゃる通り僕は僻んだ解釈ばかりしていたのです。僕は貴方の御話を聞くまでは非常に怖かったです。胸の肉が縮まる程怖かったです。けれ

ども御話を聞いて凡てが明白になったら、却って安心して気が楽になりました。もう怖い事も 不安な事もありません。その代り何だか急に心細くなりました。淋しいです。世の中にたった

(彼岸過迄: 340-342)

事実を知らされた市蔵は意外にも態度を一変した。彼は自分が「僻んだ解釈ばかりしていた」ことを素直に認めた。そして今まで「非常に怖かった」自分の心境を叔父に告白した。すべてを知った彼は「安心して気が楽に」なったが、今度は非常に「淋し」くなった今の気持ちを明かす。もはや血のつながりのあるものは誰一人としていないことを知り、「世の中にたった一人立っている様な」心境を味わったのである18)。これを見ると、市蔵が秘密を明かされる前の態度と秘密を明かされた後の態度はあまりにも違うことがわかる。秘密を明かされる前の彼の態度には病的なものと「僕を嫌っている」と言って「淋しく笑」うようなひねくれた性格を感じるが、秘密を明かされた後の態度からはそういったものは一掃され、素直でまっすぐな心を見る。今まで彼をこのような性格にさせたものが市蔵の出生の秘密の隠蔽にあったということであろうが、性格の変化があまりに大きく、これではそれまでの市蔵の特異な性格が病気によるものだったということはできないだろう「9」。そうだとすればそれまでの市蔵の性格に対する病的描写については疑問が残る。いずれにしてもこの文章からは市蔵がそれまで自閉病だったわけでも欝病だったわけでもなかったということができる。彼は出生の秘密の隠蔽のために疎外されたような孤独感を味わってきたのであ

¹⁸⁾ 孤独依存を患う人たちは自分自身とも周囲の人々ともつながっている感覚をもっておらず、あたかも世界から切り離されてしまっているかのようである。(カトリーヌ・オディベール/平野暁人(訳) 前 掲書、p.219)

¹⁹⁾ 市蔵は母の実の子でないという事実を知らされた後、「落ち付いて書斎に座っていることが困難にな」(彼岸過迄:348)ったと言い、卒業試験が終わるやいなや「一寸旅行して来る」(彼岸過迄:347)と言うが、松本が「陰鬱な色に巻紙を染めた痕跡が、その何処にも見い出せなかった」(彼岸過迄:354)と言うように市蔵の精神状態は極めて安定しており、松本を「安心」(彼岸過迄:354)させた。(彼岸過迄:354)

り、その疎外感や孤独感が彼にこのような態度を取らせていたということになる。

松本によれば、市蔵はその出生の秘密を知ることを恐れて、その不安のために僻んでい る。ゆえに松本は市蔵に見られる不思議な反応や性格は彼の僻みによるものと判断したの である。それゆえ松本は市蔵に対する秘密を明かすことで「もうその問題に就てかれこれと いうのは止しにしよう」と言った。「僻みさえさらりと棄ててしまえ」と言うのである。も し、市蔵が松本の思っているような「健全な精神を持っている」人なら、それは可能である と言えよう。

3. 市蔵の自意識

今度は市蔵本人の話をもとに市蔵の性格を分析したい。次は「須永の話」の一部である。

僕はまだ痛切な恋に落ちた経験がない。一人の女を二人で争った覚は猶更ない。自白すると 僕は若い女殊に美くしい若い女に対しては、普通以上に精密な注意を拂い得る男なのである。 往来を歩いて綺麗な顔と綺麗な着物を見ると、雲間から明らかな日が射した時の様に晴やかな 心特になる。たまにはその所有者になって見たいと云う考も起る。然しその顔とその着物がど う果敢なく変化し得るかをすぐ予想して、酔が去って急にぞっとする人の浅間しさを覚え る。僕をして執念く美くしい人に附纏わらせないものは、正にこの酒に棄てられた淋しみの障 害に過ぎない。僕はこの気分に乗り移られるたびに、若い自分が突然老人か坊主に変ったので はあるまいかと思って、非常な不愉快に陥る。 (彼岸過迄: 267-268)

久保田芳太郎は市蔵が「女性の魅力は時間が経過するか、固定するかしてしまうと消失し てしまうといっていた。だからまたその消失を恐れてはげしいエロスにとりつかれるのを 恐れていた」20)のだと言う。久保田は市蔵が女性に魅力を感じてもその感情がすぐ消えてし まうことを恐れて女性に関心を持とうとしないのだと言っている。しかし、魅力が消失し てしまうというのはどういうことなのか。これは女性に魅力を感じてもすぐ興味がなく なってしまうということだろうが、これはどういうことか。ここではまず「酔が去って急に ぞっとする」ような「酒に棄てられた淋しみ」が何なのかを解く必要があろう。 市蔵は「その 顔とその着物がどう果敢なく変化し得るかをすぐ予想して」そうなると言っているが、これ

²⁰⁾ 久保田芳太郎(1994) 前掲書、p.262

は美しかったものが美しくなくなるのを見て、それに失望するという意味であろう。ここ で「酔」とは異性に対する感情の高ぶりのことを言っていると言えるが、その感情が冷めて 「ぞっとする」というのは恐ろしさや嫌悪感を感じた時の感覚であろう。 美しい女性を見た 瞬間、引かれはするが、すぐ嫌悪感を感じるというのである21)。そして「酒に棄てられた淋 しみ」とは感情が冷めることに対して感じる「淋し」さのことであろうか。しかもそれを彼は 「障害」と称している。市蔵はこのような自分の情緒的変化を精神的障害であると自覚して いると言える22)。

然し僕は断言する。若しその恋と同じ度合の劇烈な競爭を敢てしなければ思う人が手に入ら ないなら、僕はどんな苦痛と犠牲を忍んでも、超然と手を懐ろにして恋人を見棄ててしまう積 でいる。男らしくないとも、勇気に乏しいとも、意志が薄弱だとも、他から評したらどうにで も評されるだろう。けれどもそれ程切ない競爭をしなければ吾有に出来にくい程、何方へ動い ても好い女なら、それ程切ない競爭に価しない女だとしか僕には認められないのである。 僕に は自分に靡かない女を無理に抱く喜こびよりは、相手の恋を自由の野に放って遣った時の男ら しい気分で、わが失恋の瘡痕を淋しく見詰めている方が、どの位良心に対して満足が多いか分 らないのである。 (彼岸過迄: 286)

久保田芳太郎は「これは男の自負心とも受けとれる」23)と言い、吉村善夫は「俺のよさが 分からないような女は相手にしないという大見栄なのである」24)と言う。 いずれも自尊心を 傷つけられないようにあえて女性に近づかなくなった男の心理のことを言っている。しか し、ここに書かれている内容を単なる男の「自負心」や「大見栄」でかたづけてよいものだろ うか。ここで「僕は超然と恋人を見棄ててしまう積でいる」とは「男らしくない」とか、「勇気 に乏しい」という程度を超えて人間の人格の問題を表わしている。これは道德的に悪いと も、人格的に問題があるとも、精神的に障害があるとも言うことができよう25)。「競爭に価

²¹⁾ 女性の魅力に惹かれるよりもむしろ不快を覚えるような男性は、異常な抑圧状態に陥っているので あって、しばしば幼年時代における心理的体験がその原因となっている。このような場面、異性愛 関係からの逃避は神経症の一症状なのである。(D・J・ウェスト/村上仁(訳)(1977)『同性愛』人文書 院、p.16)

²²⁾ 愛と性とが人間の大部分の神経症的葛藤の根本にある。神経症者の多くに性的関係の障害が認めら れる。(D・J・ウェスト/村上仁(訳)(1977) 前掲書、p.181)

²³⁾ 久保田芳太郎(1994) 前掲書、p.263

²⁴⁾ 吉村善夫(1980)『夏目漱石』春秋社、p.244

²⁵⁾ 倒錯した病的自我とは、自分以外の誰をも受け入れられないような自己中心的自我であり、性格異 常人格とは他人や自分を相手に調和のとれた緊密な連帯を作り出すことのできない人であり、その 性格特徴の一つが肥大した方向に突出した人である。(山口泰司(1999)『心の探求』文化書房博文社、

しない女だ」とか、「相手の恋を自由の野に放って遣った」とか強がりを言っているとも捉え られるが、青年の発想としてはあまりに幼稚であり、これはナルシシズム(narcissism)の一 種であると言える。ナルシシズムとはいわば過度の自己愛であり、その自己中心的偏向の ために年齢に応じた人格的成長が妨げられると言われる26)。

その後、千代子は市蔵と叔母である市蔵の母を鎌倉に招くが、そこには高木という青年 も招かれており、市蔵は鎌倉で予想もしなかった男性と出会うこととなる。

僕は千代子にこう云った。-「千代ちゃん行っちゃどうだ。彼方の方が広くって楽な様だか ら」「何故、此所に居ちゃ邪魔なの」千代子はそう云ったまま動こうとしなかった。僕には高木が いるから彼方へ行けというのだという様な説明は、露骨と聞こえるにしろ、厭味と受取られ るにしろ、全く口にする勇気は出なかった。ただ彼女からこう云われた僕の胸に、一種の嬉し さが閃めいたのは、口と腹とどう裏表になっているかを曝露する好い証拠で、自分で自分の 薄弱な性情を自覚しない僕には痛い打撃であった。 (彼岸過迄: 287)

千代子に彼方へ行けと言ったのに市蔵の側を離れようとしない千代子に対して市蔵の胸 に「嬉しさが閃め」くと同時に彼は「痛い打撃」を受けたと言う。「口と腹と裏表になっている 」自分が「曝露」されたからである。彼はここで「自分で自分の薄弱な性情を自覚」したわけで ある。では、市蔵は本当は千代子のことが好きだったというのであろうか。ここでは市蔵 自身が自分の心の嘘に気づいたことがわかる。

僕はこの二日間に娶る積のない女に釣られそうになった。そうして高木という男が苟しくも 眼の前に出没する限りは、厭でも仕舞まで釣られて行きそうな心持がした。僕は高木に対して 競争心を有たないと先に断ったが、誤解を防ぐために、もう一度同じ言葉を繰り返したい。も し千代子と高木と僕と三人が巴になって恋か愛か人情かの旋風の中に狂うならば、その時僕を 動かす力は高木に勝とうという競爭心でない事を僕は断言する。 それは高い塔の上から下を見 た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければいられない神経作用と同じ物だと断言する。結 果が高木に対して勝つか負けるかに帰着する上部から云えば、競争と見えるかも知れない が、動力は全く独立した一種の働きである。しかもその動力は高木が居さえしなければ決して 僕を襲って来ないのである。僕はその二日間に、この怪しい力の閃を物凄く感じた。そうして

p.165)

²⁶⁾ ナルシシズムは青年をいつまでも幻想の中に閉じこめ、他人との有意義な交際を通して成長するこ とを禁じてしまう。(ダン・カイリー/小此木啓吾(訳)(1999) 『ピーター・パン・シンドローム』祥傳 社、p.23)

強い決心と共にすぐ鎌倉を去った。 (彼岸過迄: 293-294)

市蔵は千代子がこのような形で自分を招く目的が何なのか勘繰るのであるが、我知らず高木に対する嫉妬心が露になるのを知る。市蔵は千代子と二人だけの時は、千代子に対して何ら特別の異性感情を感じなかった。それが高木と三人で会う時は、なぜか高木を意識して行動している自分であることを知るようになる。「高木に対して競争心を有たない」と思うものの、反対に千代子を前にして高木と競争している自分の姿を発見するのである。そしてとうとう市蔵は、千代子が市蔵の気持ちを刺戟して市蔵をして千代子に求婚させようとしているのではないかと疑うようになる。千代子に「釣られそうにな」ることを危惧した市蔵はとうとう何の前触れもなくその夜、急に鎌倉を去る。それは千代子はもちろん、周囲の人たちにとっても意外な行動であり、みんなを驚かせた。しかし、それでも市蔵は何らためらうことなく、ただ一人その場を去ったのである。

僕は自分の気分が小説になり掛けた刹那に驚ろいて、東京に引き返したのである。だから 汽車の中の僕は、半分は優者で半分は劣者であった。比較的乗客の少ない中等列車のうちで、 僕は自分と書き出して自分と裂き棄てた様なこの小説の続きを色々に想像した。(中略)僕はそ の何れをも嘗め試ろみる機会を失って却って自分の為に喜んだ。人は僕を老人みた様だと云っ て嘲けるだろう。(中略)僕は嘲けられても満足である。 (彼岸過迄: 294)

驚く千代子や母を残して夜行列車に乗った市蔵であるが、汽車の中で考えたことは自分の行動が彼らにどう映ったかではなく、自分の気持ちについてだけであった。彼は自分が「半分は優者で半分は劣者」だと思った。すなわち、千代子の思い通り高木に刺激されて千代子に求婚するようなまねをすることなく、無事帰ることができたことが「優者」であり、夜の夜行に乗って逃げるように帰る自分の姿は自分から見ても「劣者」に見えたのであろう。また彼は「自分の為に喜んだ」とも言っている。これらのことから、市蔵の頭の中にあるのは自分の事だけであり、自分の思い通り事が進むことだけをよしとしていることがわかる。この時、彼の頭の中には千代子や母のこと、そして高木のことは少しも思い浮かばなかったのだと言える。これを単なる彼の性格と言うことはできないだろう。

このように市蔵は彼が鎌倉を去った理由を千代子に「釣られそうになった」からだと弁明 しているが、本当の理由は高木の存在にあったと言えよう。男として見栄えのする高木に 比べて自分から見ても見劣りのする市蔵は高木に対して劣等感を感じずにはおられなかっ たことであろう。いずれにしても市蔵のプライドは高木と競うことを許さなかったであろ

う。たとえここで市蔵が千代子への自分の愛情に気づいたとしても自尊心の高い市蔵は千 代子を「見棄ててしまう」よりなく、「相手の恋を自由の野に放って遣」っては「失恋の瘡痕を 淋しく見詰めている」しかなかったはずである。それゆえ市蔵はその場から逃避するよりな かったのである。

次は「須永の話」の中にある母への思いを書いた部分である。

僕は自分の嗜好や性質の上に於て、母に大変能く似た所と、全く違った所と両方有ってい る。これはまだ誰にも話さない秘密だが、実は単に自分の心得として、過去幾年かの間、僕 は母と自分と何処がどう違って、何処がどう似ているかの詳しい研究を人知れず重ねたのであ る。何故そんな真似をしたかと母に聞かれては云い兼る。たとい僕が自分に聞き糺して見ても 判切云えなかったのだから、理由は話せない。然し結果からいうとこうである。-欠点でも母と 共に具えているなら僕は大変嬉しかった。長所でも母になくって僕だけ有っていると甚だ不愉 快になった。その内で僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで緣のな い眼鼻立に出来上っている事であった。僕は今でも鏡を見るたびに、器量が落ちても構わな いから、もっと母の人相を多量に受け継いで置いたら、母の子らしくってさぞ心持が好いだろ うと思う。 (彼岸過迄: 274-275)

これは市蔵がまだ自分と母親の本当の関係を知らなかった頃の話であるが、市蔵は「人知 れず」母と「自分と何処がどう違って、何処がどう似ているか」を比較してきたと言う。「理 由は話せない」と言うように市蔵がなぜこういうことに関心を持ったのかは秘密であると 言って決して明かそうとしない。おそらくかなり前から「母の子らしく」ない自分に気づい ていたのだろう27)。「僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで緣のない眼鼻立に出来上ってい る」理由をすでに探索していたことがわかる。このように市蔵の人格は年齢に比べて未成熟 であり、他人に対する配慮や共感も欠けている。市蔵は自分が母親の実の子でないことを うすうす感じ始め、悩んでいたようであるが、この問題は彼の女性に対する不思議な情緒 や人格的未発達や自己中心性と無関ではないと言える。

²⁷⁾ 父は死ぬ二三日前僕を枕元に呼んで「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくっちゃならない ぞ。知ってるか」と云った。(中略)母は突然(中略)「御父さんが御亡くなりになっても、御母さんが今 まで通り可愛がって上るから安心なさいよ」と云った。 (中略)僕の記憶を生長の後に至って遠くの方 で曇らすものは、この二人のこの時のこの言葉である。彼等の言葉に僕は何故厚い疑惑の裏打をし なければならないのか、それは僕自身に聞いて見てもまるで説明が付かなかった。(彼岸過迄: 225-226)

4. 心の歪み

以上のように「松本の話」と「須永の話」から松本が語る市蔵についての話と市蔵自身が語る市蔵の内面についての話を分析し、市蔵の性格を見てきた。「松本の話」の最後で作者が語ろうとした結末は、自分の出生に対する疑いのために悩んできた市蔵が、松本から事実を明かされることで悩みから解放されたということであると言える。「須永の話」で作者は市蔵の普通でない性格を描いたが、「松本の話」で市蔵の出生の秘密を明かし、市蔵をそのような性格にしたものは市蔵の出生の秘密のためだったことを示唆したものと思われる。しかし、問題となるのは「須永の話」を中心に描かれた市蔵の異常な性格である。それは多くの精神医学者が関心を持って指摘しているように精神的病の症状を描いているからである。

すなわち、「須永の話」は主に市蔵自身が女性との交流の困難さを語ったものだが28)、異性に対する彼の普通とは言えない情緒や反応が明かされており、彼の人格障害(personality disorder)が窺える29)。彼は内向的であるだけでなく、非常に利己的であり、彼の年齢にふさわしい精神状態とは言えない30)。「松本の話」にも市蔵の自閉症(autism)的性格が描かれており、彼が現実世界ではなく別の世界を生きているかのような印象を与え、精神分裂症(schizophrenia)をも疑わせる。彼の女性に対する無関心はもっと深刻な精神的病に原因があるのではないかという危惧さえ感じさせる。しかし、そのような市蔵も松本から出生の秘密を明かされるやいなや態度が一変する。急に素直な青年に変わるというのである。この変化を見ると、それまで見せてきた市蔵の特異な態度は松本が「僻み」と言ったようにある事柄に対して市蔵が示した故意的な反応であったということになる。しかし、もしそうだとすれば、それまでの市蔵に関する不思議な性格描写は市蔵を過度に病的に描いたということになる。

『彼岸過迄』の全体の筋から見る限り、市蔵が病気だったとは言えない。彼は出生の問題

²⁸⁾ 女性を愛せない。愛されるのを嫌がっている。自分からつくり出した孤独という名の牢獄に閉じこめられている。(ダン・カイリー/小此木啓吾(訳)(1993) 前掲書、p.23)

²⁹⁾ 自閉的になって感情がだんだん冷たくなって喜び、悲しみ、同情といった感情が湧いてこなくなり、だんだん無気力になってくる。(小田晋(1994)『人はなぜ気が狂うのか?』はまの出版、p.115)

³⁰⁾ 疎外感・孤立感を感じて傷つくことを恐れ、母子の世界や孤独な世界にとじこもってしまう。そして逃避的で非社会的な行動をとる結果、自己概念の歪みが強化されてしまう。女性との関係でライバルと競争しても負けるだろうという非観的予想から好意を抱いている女性に対しても真向から接近する努力をせず、逃避し、歪曲した行動にでる。女性との間に距離をおく臆病な方法である。(稲村博(1982)『性』共立出版、pp.176-177)

のために悩み、苦しんでいたからである31)。 市蔵は出生に対する疑惑の中で家族や親戚が 自分にだけ秘密を隠して事実を教えないかの如く思いこみ、自分一人疎外されているよう に感じて孤独に生きてきたというのである。ゆえに松本に対する「軽侮の色」を帯びた「淋し」 い「笑」いや反抗的熊度は、このような精神状態において彼が松本に示した反応であり、そ れは彼が精神的病に冒されているというよりも心が歪んでいることを表わしていると言え Z32)

人はなぜ心が歪むのか。僻むとは一時的な心の状態を言うが、心が歪むというのは、も はや元通りにならないほど心が変形してしまい、あたかもそれが性格であるかのように固 定してしまった状態のことを言う。まっすぐだった心が歪むと、普通ではない反応を示 し、尋常でない行動を取るようになる。このような心の歪みは社会生活において周囲との 間でさまざまな葛藤を牛み、生きること自体が苦しみとなろう。

市蔵をこのような心の歪んだ性格にしたものは彼の内向性や病気のためではなく、出生 の秘密を「誰も教えて呉れ」なかったという疎外感のためであり、誰にも明かすことのでき なかった彼の淋しさのためだったのではなかろうか³³)。それゆえ市蔵は「話を聞いて凡てが 明白になったら」、「もう怖い事も不安な事もありません」と言ったのである。 市蔵の不安は 自分が母の実の子ではないのではないかという疑惑に発っしたものではあったが、彼の苦 しみは誰にも話すことができないという孤独感にあったと言える。「松本の話」の筋からは この出生の秘密に対する隠蔽が市蔵の心を暗くし、彼を心がひねくれたような青年にした ということがわかる34)。

市蔵は「僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで縁のない眼鼻立に 出来上っている事であった」と自分の過去を回想しているが、市蔵の心をこのように歪んだ

³¹⁾ 継母の場合は、この心の奥の母への思慕がない、母への憧れは非常に强いが、それは亡き母へと向 かい、継母からはますます遠ざかることになる。(牛島義友(1978)『家族関係の心理』金子書房、p.125)

³²⁾ 精神の硬直と感情的なパニックがナルシシズムと重なりあって、彼らの考え方は歪んだものになっ ている(ジョン・レイティ/キャサリン・ジョンソン/山下篤子(訳)(1999)『シャドー・シンドローム』河 出書房、p.158)

³³⁾ 他者や社会に対する信賴感が失われ、孤立感や疎外感が生まれる。(倉木英彦(2002)『社会的ひきこも りへの援助』ほんの森出版、p.35) 市蔵は継母からも叔父からも、そして千代子からも愛されながらど うして素直にその愛を受け止めることができなかったのだろうか。彼は相手の好意を感じてもそれ を疑う。そのため、いつも相手に対して傷つき、相手を憎む。これが市蔵の習性である。市蔵が愛 を受け入れることができないのは、人を信頼することができないからである。

³⁴⁾ 平岡敏夫は「出生にかかわる暗い疑惑が須永の性格形成の根本原因」だと言うが、本稿ではそれに加 えて「出生の秘密に対する隠蔽」が問題になっており、「出生の秘密を誰も教えて呉れなかったという 疎外感」やこの悩みを「誰にも明かすことができなかった淋しさ」や孤独感が市蔵の心を歪んだものに したと見る。

ものにしたのは、母親が実母でないということよりも「唯僕だけが知らない」という疎外感のためであり、「独りで考えていたのです」という孤独感のためであろう。結局、市蔵の心を歪んだものにしたのは、孤独と淋しさであったと言うことができる35)。

5. 結論

以上のように『彼岸渦迄』における「松本の話」と「須永の話」から須永市蔵の性格を分析し た。「須永の話」には異性を愛することのできない市蔵の人格障害(personality disorder)的性 格や神経症(neurosis)的症状、そして極度な自己中心性(egocentrism)が描かれており、それは 偏屈とか孤独癖の領域を超えて病的であると言わざるをえない。 しかし、「松本の話」で松 本は市蔵の性格の特異さを市蔵の僻みと見た。市蔵は出生の秘密を感じとって僻んでいる と見なしたのである。事実、市蔵の出生の秘密が暴かれるやいなや市蔵は別人のようにな り、悩みや苦しみから解放され、それ以後の市蔵に僻みは見られなくなる。松本の話を聞 いて市蔵の態度が急変したのを見ると、市蔵がそれまで自閉症(autism)や欝病(depressive psychosis)患者であったとは言いがたい。 市蔵の自閉症説や欝病説は誤診ということになろ う。そうであれば、それまでの市蔵に見られる自閉症や欝病の症状のような性格描写は何 なのかという疑問を持たざるをえず、ここに矛盾が生じるのであるが、この市蔵に見られ る異常な性格は作者が意図的に書き加えたものであると言うことができる。これらの文章 は「見事に病気を描写」したものではあるが、話の筋と一致する内容ではなく、「須永の話」 で見事に描かれたいわば市蔵の病的症状が出生の秘密を知ることで急に治るとは考えられ ないからである。このように市蔵の性格描写と話の筋との間には少なからず食い違いがあ るが、これは作者漱石が市蔵に漱石自身の感覚を過度に投射したためであると思われる。 これはこの小説の筋に矛盾を生む結果になったが、この小説をより興味深く、意味深長な ものにしていると言える。

結局、市蔵は自分の出生に疑いを抱くことで心の中で家族や親族から孤立するようになったと言える。誰も彼の出生の秘密を教えてくれず、誰にも聞くことができないという 状況の中で市蔵は孤独に生きるよりなかったのである。ゆえに市蔵をこのような心の歪ん

³⁵⁾ 幼いころにひとりぼっちで過ごした時間が長すぎると、その孤独状態から生まれた精神のひずみは、一生かけてもどうにもならない。他者に愛情を示すことも性的な関心をもつこともほとんどない。(カトリーヌ・オディベール/平野暁人(訳)『「ひとりではいられない」症候群』講談社、p.46)

だ性格にしたものは孤独感や疎外感にあったと言うことができる。

【參考文獻】

秋山公男(1991)「『彼岸過迄』試論」玉井敬之(編)『漱石作品集成 彼岸過迄』桜楓社、p.179 上出惠子(1991)「夏目漱石"彼岸過迄。序論」玉井敬之(編)『漱石作品集成 彼岸過迄。桜楓社、p.213 岡崎義恵(1991)「『彼岸過迄』」玉井敬之(編)『漱石作品集成 彼岸過迄』桜楓社、pp.30-31 小木貞孝(1991)「漱石の作品と病跡」平岡敏夫『日本文学研究大成 夏目漱石Ⅱ』 國書刊行会、p.323 稲村博(1982)『性』共立出版、pp.176-177 牛島義友(1978)『家族関係の心理』金子書房、p.125 小田晋(1994)『人はなぜ気が狂うのか?』はまの出版、p.115 北垣隆一(1968)『改稿 漱石の精神分析』北沢書店、p.12 久保田芳太郎(1994)『漱石- その志向するもの』三弥書店、p.270 倉木英彦(2002)『社会的ひきこもりへの援助』ほんの森出版、p.35 七谷七郎(1963)『漱石の病跡』勁草書房、p.31 竹中均(2012)『精神分析と自閉症』講談社、p.93、p.152 夏目漱石(2016)『彼岸過迄』新潮社、p.328. 平井富夫(1990)『神経症 夏目漱石』福武書店、p.230、p.236、p.339 平岡敏夫(1979)『漱石序説』塙書房、p.281 松本寛(1997)『漱石の実験』朝文社、p.13 宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社、p.138 山口泰司(1999)『心の探求』文化書房博文社、p.165 吉村善夫(1980)『夏目漱石』春秋社、p.244 ウルズラ・ヌーバー/丘沢静也(訳)(2005)『<傷つきやすい子ども>という神話』岩波書店、p.58 カトリーヌ・オディベール/平野暁人(訳)(2012)『「ひとりではいられない」症候群』講談社、p.46 ジョン・レイティ/キャサリン・ジョンソン/山下篤子(訳)(1999)『シャドー・シンドローム』河出書房、p.158 ダン・カイリー/小此木啓吾(訳)(1993) 『ピーター・パン・シンドローム』 祥傳社、p.23 ヘル、フィッシャー・フェルテン/植木啓文(監訳)(1998)『みんなで学ぶ精神分裂症』星和書店、p.55、p.62 D・J・ウェスト/村上仁(訳)(1977)『同性愛』人文書院、p.16 J・W.アスティントン/松村鴨隆(訳)(2000)『子供はどのように心を発見するか』新曜社、p.197

> 논문투고일: 2021년 09월 18일 심사개시일: 2021년 10월 18일 1차 수정일: 2021년 11월 07일 2차 수정일: 2021년 11월 15일 게재확정일: 2021년 11월 20일

『彼岸過迄』に現れた市蔵の心の歪み

- 市蔵の性格描写と出生の悩みの間における矛盾 -

矢野尊義

今まで『彼岸過迄』の「須永の話」に現われた市蔵の特異な性格に対しては多くの研究者や精神医学者が市蔵や作者漱石 の精神的病を指摘した。 市蔵を通して精神的病が見事に描かれているというのである。 しかし、 「松本の話」 において自 分の出生の秘密を明かされた市蔵は性格が一変する。彼は悩みから解放されたと言い、急に素直な自分に帰る。これは 市蔵のそれまでの特異な性格が精神的病によるものではなく、故意的に取ってきた態度であったということになる。精 神的病がある真実を知ることで一挙に治ることはありえないからである。ゆえに「須永の話」の内容と「松本の話」の内容 とは少なからず矛盾を含んでいることになるのであるが、「須永の話」に描かれた市蔵の精神的病の症状は作者が自身の 感覚を過分に投射したためであると思われる。結局、市蔵の特異な性格は市蔵の心が歪んだ結果であり、それは自分の 出生の秘密に気づきながらも誰にも聞くことができず、また教えてくれる人もいないという疎外感と孤独感が作ったも のであったということができる。

The Warped Personality of Ichizo on HIGANSUGIMADE

- Contradiction between the Description of Personality and Mental Affliction of Birth -

Yano, Takatoshi

According to "Talk of Matsumoto", Ichizo changed his mind and he stopped to think himself as inferiority after noticing his secret of birth. He got over his suffering. But this plot makes understanding of "Talk of Ichizo" confused. Because it is not easy to cure abnormal personality like as Ichizo which is described in "Talk of Ichizo". How did he change his character? Is it possible that a word which Matsumoto revealed cure Ichizo of mental disease? It means that Ichizo was not psychopathic personality but warped personality. So it must be true that some description of mental disorder about Ichizo was added by Soseki intentionally. After all Ichizo grew up feeling alienation and loneliness under concealment of his birth in his family and relatives. So the feeling of alienation and loneliness made his mind warped and he became warped personality.